村上春樹「独立器官」論
――後藤へ向けられたテクストとして――

榊　裕希

As a Text Directed to Goto:
A Study on Haruki Murakami's "An Independent Organ"

Yuki Sakaki

Abstract

Haruki Murakami's short story "An Independent Organ" has so far been read as a heterosexual love story because it is a short story based on the concept of "a man who loses a woman," and because the narrative of Tokai and "Tokai's girlfriend" is the main focus of this novella. In this first-person story, "I" narrate the story of Tokai as valuable, poisoned by the norm of loving one person, getting married, and having children, but the storyteller's value judgment is shaken by Tokai's girlfriend's actions. By focusing on Goto, who works as Tokai's secretary, this paper exposes this heterosexual norm and reads objections to it, given the nature of the text addressed to Goto.

１．はじめに

村上春樹「独立器官」は『文藝春秋』2014 年 3 月号に掲載され、同年 4 月に「いろんな事情で女性に去られてしまった男たち、あるいは去られようとしている男たち」[1]というコンセプトで編まれた短編集『女のいない男たち』に収録された短編小説である。作品のあらすじは以下の通りである。

52 歳の美容整形外科医の渡会と「僕」（谷村）はジムで知り合い、スカッシュをしてビールを飲み、親交を深めている。渡会は独身主義者として決まった恋人を作らずに、既に恋人や配偶者のいる女性の浮気相手・不倫相手としての生活を謳歌している。しかし彼はあるとき夫と子供を持った女性に深く恋をしてしまう。恋に心を乱されることのないよう統制された人生を送ってきた渡会にとって、これは初めての出来事だった。渡会は、恋を通して得た自分が何者であるのかという悩みや、コントロールできない怒りの恐ろしさについて「僕」に語る。その後、渡会はジムに顔を見せなくなり、渡会の秘書である後藤から、渡会は死んだと聞かされる。渡会の恋の顛末を後藤は語り、「僕」にスカッシュラケットを渡して、渡会を忘れないように依頼する。「僕」は後藤の依頼を承諾し、渡会医師を忘れないように「独立器官」を発表する。しかし、死に向かう渡会からのメッセージが込められていると思しいラケットは「僕」にとっては「軽すぎる」ことや、死に向かっていく渡会を連想させるため、使われずにしまっておかれ、物語

[1] 村上春樹（2016）『女のいない男たち』文春文庫、p.10

は幕を閉じる。

「独立器官」というテクストは、「僕」が「後藤青年がどこかでこの文章を読んでくれればと思う」[2]と願っているように、後藤に対してのものでもあるはずであるが、その性質は黙殺され、先行研究においては、渡会の未成熟さ[3]、渡会が恋した女性（本稿では便宜的に「彼女」とする）と渡会の無意識[4]との関わりが論じられてきた。いずれにしても「女のいない男」は「彼女」に去られ自死する渡会の、いわば「しっぺ返しの物語」であるとして評価されてきたといえる。渡会は未熟で、女性たちを肉体としてしか見ない男であったために「彼女」を通して自身の罪悪感によって自ら命を絶つ。このような筋書きの物語であるため、「女のいない男」として渡会が注目されてきたこともうなずけなくはない。

しかし、そもそも短編集『女のいない男たち』は「いろんな事情で女性に去られてしまった男たち、あるいは去られようとしている男たち」というヘテロセクシュアリティに裏打ちされたコンセプトで編まれた短編集である。そのなかで「もちろんゲイ」として半ばアウティングのように（「僕」が後藤からセクシュアリティの言及をしてもよいという了承を取ったというような部分は作中には見受けられない）、セクシュアリティが明かされる後藤には、大きな意味があるように思われる。

また、既存の規範から離れた欲望のあり方をクィアと呼ぶが、ゲイの後藤だけでなく、結婚や出産、一夫一妻制を忌避する渡会もまたその範疇ともとれる。そう考えると規範に近い性行動を行っているのは、「独立器官」においては「僕」や「彼女」、渡会を取り巻く多くの子持ちの友人たちであり、その中で孤立するように渡会と後藤という規範外の存在が立っていることになる。そして規範から外れていた渡会は、「彼女」とのロマンティック・ラブイデオロギーに取り込まれていき、自死という結末を迎える。

そうであるならば、後藤や渡会はこの物語でどのような意味を持つのか。異性愛規範は打ち破られるのか、もしくは打ち破られることはないのか。異性愛者の物語として読まれてきた「独立器官」に表れる愛の規範に着目し、クィアな物語として分析する。

2.「僕」の恋愛規範

「独立器官」は起こっていることが直接的に語られているのではなく、語り手である「僕」が起こったことについて推測や伝聞も交えて語られているテクストである。そのため、「独立器官」に描かれている文章には、真偽がほぼ特定不可能な形で混ざり合っている。まずはそのような語りを行っている「僕」について分析していくこととする。

物語の冒頭から「僕」は「純粋な客観的事実だけでこのポートレイトが出来上がっているわけではない」[5]として、生存していた渡会という一次的な言説だけでなく、「僕」の推測や聞き書きなどの二次的な

---

[2] 村上春樹 前掲書、p.175

[3] 東海義仁（2019）「喪失とモラトリアム：村上春樹『イエスタデイ』『独立器官』『シェエラザード』」『富山大学国語教育』（2019,11,44、富山大学国語教育学会）

[4] ダルミ・カタリン「『女のいない男たち』におけるファムファタール表象と男たちの運命」中村三春監修、曾秋桂編『村上春樹研究叢書 TC008　村上春樹における運命』（2021,4、淡江大学出版中心）

[5] 村上春樹 前掲書、p.128

言説が併存したテクストとして「独立器官」は読者に提出されている。本作は物語中における事実を材料として、フィクションを織り交ぜて語られる作品という注意書きが冒頭に置かれている作品であるといえよう。

「ポートレイト」、すなわち肖像画という表現を「僕」は使っている。「独立器官」は、物語中の事実の他、「僕」の想像やまた聞きの情報も混ぜ込まれ、いわば「僕」によって美化した理想像の肖像が書き込まれていると考えられる。東海義仁は渡会医師の死にまつわる「僕」と後藤の表現の差について分析し、「僕」が「渡会医師を祭り上げるように語っていることは明白である」[6]と指摘している。

渡会が「彼女」に恋をしてからは、実存的な悩みを持ったり、耐え難い「怒りのようなもの」[7]を感じたり、精神的に追い込まれ、本命の男と暮らすための足掛かりとして捨てられる。そして拒食症のような症状が現れて、渡会は餓死してしまう。このような顛末を迎える渡会の死について、「僕」は「もしそうしようと思えば、彼はこれまで通り技巧的な人生を継続し、まっとうすることだってできたのだ」[8]と「自ら死を受け入れた」[9]というニュアンスを強調するものの、対する後藤は「本当に文字通り、食べ物が喉を通らなくなっ」[10]て「生きる意志をなくしてしまわれた」[11]と本人の意志ではどうにもならないという表現がされていることから、東海の指摘は的確であろう。しかし、なぜ渡会を祭り上げるのかという点について東海は触れていない。作品に張り巡らされている愛と献身のありようや、「僕」の語りの権力には「僕」自身の内面が深く関わっているはずだ。

渡会は「僕」の叙述によって「彼女」に対して命を投げ出すほど愛した人間として定められており、また「僕」は気付いていないようだが、自身よりも愛した相手に献身する人間として、後藤も挙げられる。黒岩裕市は村上春樹作品に頻出するゲイの登場人物を分析しており、後藤については「魅力的な脇役」[12]という触れ方に留まっているが、「脇役」に留まらないほど彼から渡会への献身は本文で強調されている。

> 渡会の経営するクリニックには、長年彼のために働いている優秀な男性秘書がいて、（略）もしその有能な秘書がいなかったら、まず間違いなく、渡会の華麗な私生活はこれほどまでに華麗には運営されていなかったはずだ。彼は感謝の意味を込めて、機会あるごとにそのハンサムな秘書（もちろんゲイだった）に贈り物をした。[13]

渡会の「華麗な私生活」を支える男として、この時点ではまだ名前は出てこないものの、後藤がこのように紹介される。仕事の調整に加え、女性との旅行のセッティングや、交際している女性の生理周期の把

---

[6] 東海義仁 前掲論文、p.36
[7] 村上春樹 前掲書、p.156
[8] 村上春樹 前掲書、p.176
[9] 東海義仁 前掲論文、p.36
[10] 村上春樹 前掲書、p.168
[11] 村上春樹 前掲書、p.170
[12] 黒岩裕市『ゲイの可視化を読む―現代文学に描かれる＜性の多様性？＞―』（2016,16 晃洋書房、p.28）
[13] 村上春樹 前掲書、p.138

握まで後藤は行っており、そこに「もちろんゲイ」という補助線を引いている。そして、「もちろん」という記述から、「僕」は読者と後藤のセクシュアリティについてある程度の共通認識を求めていることが分かる。この共通認識とは何か。

時間軸が前後してしまうが、この文章を書いている「僕」は既に後藤と会っており、その際に彼の涙から「彼は渡会医師のことが心から好きだったようだ。」[14]と渡会への好意を読み込んでいる。

「僕」のこの認識をもとに「もちろんゲイだった」という補助線をみると、後藤から渡会への献身の理由に好意――後藤は「心から尊敬していました」というが、愛と言っても行き過ぎではあるまい――が導かれている。

尊敬と愛は異なるものかもしれないが、尊敬と愛の差をここで議論したいわけではない。確かに、愛というと例えば性欲や独占欲のような欲望の問題が起きるはずだが、そのような気配は潔癖なまでに後藤から取り除かれており、女性に嫉妬をしているようなそぶりはテクストからは見当たらないし、「私生活に勝手に足を踏み込むことはでき」[15]ないという独白からは渡会に肉体関係を迫っていたようなことはなさそうである。欲望のない愛は尊敬と見分けがつかない。尊敬や好意や愛と見分けがつかないほどに、後藤の欲望はいわば漂白されている。

河口和也は同性愛者が社会に受け入れられるメカニズムの中に「『まっとうな市民』になることにより，セクシュアリティの側面を捨象することで，同性愛と異性愛の差異を減じるようにしていく」[16]脱性化のプロセスを発見している。

> 脱性化され，経済的な消費活動に貢献する人は「良い市民」として社会に迎え入れられる反面，公共の場でセックスをすることで市民的秩序を乱す人は「悪い市民」としてレッテルを貼られるか，あるいは市民カテゴリーの「外部」に放逐されることになる。[17]

後藤は渡会に対しての欲望を注意深く隠蔽し、小さな「ため息」[18]で渡会と「親しく交際している女性たちに対する諦めの気持ちを表明する」[19]に留まっており、「僕」もまた後藤の性の気配をテクストに書き込むことはない。

恋をした相手が自分ではなく他の誰かと逢瀬を重ねることはつらいことであるはずだが、仮に渡会に肉体関係を迫ったとして、雇い主と秘書という非対称的な関係である以上、そこには解雇の危険が伴う。後藤は渡会の近くにいるために秘書としての仕事をこなすしかない。河口のいう「脱性化」の力学によって後藤は自身の地位を守るために、渡会の性行動を推進させる。

---

[14] 村上春樹 前掲書、p.173

[15] 村上春樹 前掲書、p.163

[16] 河口和也「ネオリベラリズム体制とクィア的主体―可視化に伴う矛盾―」、『広島修大論集』（2013,9,54、広島修道大学学術交流センター、p.166）

[17] 河口和也 前掲論文、p.165

[18] 村上春樹 前掲書、p.163

[19] 村上春樹 前掲書、p.163

「もちろんゲイ」として献身から愛を導くとき、このような政治的駆け引きや私的な苦痛は見えにくくさせられてしまう。そしてその＜献身的ならばその根底には愛があるだろう＞という態度には恋愛に大きな価値を認める「僕」の態度も見えてくる。

3. 一対一という規範

「僕」は渡会について当初「内的な屈折や屈託があまりに乏しいせいで、その分驚くほど技巧的な人生を歩まずにはいられない種類の人々」[20]という評価を下している。そして渡会は「彼女」への恋を通し、「内的な屈折や屈託」を得て人間的に成長していき、「僕」にとって命を失うほど深く人を愛することのできた男としての地位を確立していく。「僕」が渡会を称揚する動機の一つには、彼がたとえ踏み石として便利に使われて捨てられたとしても、命を投げ出しても構わないほど愛した「普通ではない人物」[21]として定位される人物だったからという点が挙げられるだろう。

渡会は「彼女」に恋をするまでは未熟な男だったとされるが、彼女と関係を進め、技巧的な恋愛の範疇を逸脱していくことで変化し、「彼女」が失われれば「私自身までどこかに失われてしまう」[22]とまで思い詰める。そして「彼女」はいつ渡会のもとを去るか分からない。この不在の苦しみも渡会は、初めて味わうものだ。

権中納言敦忠の「逢ひ見ての　のちの心にくらぶれば　昔はものを　思はざりけり」という歌を引いて、渡会は敦忠に共感し、かつての自分は「人間としてまだ一人前じゃなかった」[23]と語るが、「彼女」との恋の苦しみによって、渡会は多くの女性と関係を持つ独身主義者から、一人の女性を致命的な深さで愛する男としてのものに変化していることが読み取れる。そして「僕」は「最後まで気づかないでいるよりはずっといい」[24]としてその変化に価値を見出す。

しかし、なぜ一人の誰かを愛することが価値となるのだろうか。「僕」の価値を見出している部分は、一対一の恋愛規範であるロマンティック・ラブイデオロギーに迎合していくことを推進していることになりはしないか。

この作品における「僕」の語りの強さは東海の指摘する通りであり、「僕」は渡会の恋に価値を与えるように表現し、涙を流す後藤に「誰かのために泣くのはつまらないことじゃない」[25]などとジャッジを下す人物である。であれば、「僕」はどのような基準を持ってジャッジを行っているのか。

そう考えて「僕」という人物を見ていくと、「僕」に関する情報は多くないことに気付く。「谷村」という姓を持ち、若い時に結婚したが子供はおらず、物書きを生業にしており、年齢は渡会よりも上であるといういくつかの情報が明らかにされているのみで、「僕」の詳細な情報は伏せられている。

---

[20] 村上春樹 前掲書、p.127
[21] 村上春樹 前掲書、p.175
[22] 村上春樹 前掲書、p.144
[23] 村上春樹 前掲書、p.147
[24] 村上春樹 前掲書、p.147
[25] 村上春樹 前掲書、p.173

しかし、家族というものをディスコミュニケーションの横溢する場であるとして「ひどい目にあう義務」[26]とする渡会に「僕」も付随して「彼のそのような見解は（いささかの図式的偏見と修辞的誇張は見受けられるにせよ）ある程度まで理解できる」[27]として、露悪的な説明からは距離を取りつつも同意をしており、家族に対し「僕」は何か思うところがあることがほのめかされる。これは、「僕」が子供を持たないことに由来していると思われる。

渡会や「僕」が想定する家族が「図式的偏見や修辞的誇張」のあるものにせよ、責任の源泉となって渡会を居心地悪くさせ、子供と夫のいる「彼女」との関係を不安なものにさせる。「彼女」はいずれ家庭を持つためにこの関係がいつ破綻するか分からない。

対して、「僕」には子供はいない。なぜ「僕」には子供がいないのかということを、「僕」は「たまたま子供はいないので」[28]と説明を回避している。「若いうちに結婚し、（略）結婚生活を維持してきたわけだが、たまたま子供はいない」と「僕」は書いているが、作らなかった、でも作れなかった、でもなく「たまたまいない」として詳しいことを述べず、文章は渡会の説明に流れていく。良好な親子関係を保つ「少数の幸運な親」[29]にはなれないという文が直後にあることから、「僕」が子供を作ることに積極的ではなかったという推測もできなくはないが、恐らく「僕」は結婚したら子供を作らなくてはいけないと規範に縛られており、自分には子供がいないという事情に言及することを避けていると思われる。その理由は自分が規範に縛られているということを露呈したくないからであろう。

日本において、結婚は「一人の男性と一人の女性が子を産み育てながら共同生活を送るという関係に対して特に法的保護を与えること」[30]と東京地方裁判所は述べており、つまり婚姻は出産や子育てをバックアップするための制度とされている。補足すると、実際には結婚はするが、子供はいない・作らないという夫婦も少なくない。国立社会保障・人口問題研究所が令和三年に実施した第16回出生動向基本調査（結婚と出産に関する全国調査）では結婚十五年から十九年の既婚者で、子供がいない世帯は七・七%となっている。

本来は独立した営みのはずの出産と婚姻だが、「僕」は「結婚生活を維持してきたわけだが子供はいない」と二項を連結して語ることから、「僕」にとって結婚と出産は深く結ばれた事象としてとらえていることが分かる。すなわち、「僕」は規範に乗じた人間であるといえる。

「彼女」についても触れておくと、「彼女」もまた、渡会と元夫との交流を断ち、最終的に「第三の男」と一対一の男女という規範的な関係に落ち着いていく。

「僕」は称揚の価値判断という語りのレベルで、「彼女」は渡会を死に追いやる物語のレベルで一夫一妻制の規範が強調される中で、この規範になじめず、決まった相手を作らず華やかな生活を送っていた時期の渡会は、未成長な人物として位置づけられ、「彼女」と一対一の関係を望むようになると、それが成長であるかのように意味づけられる。多くの相手と関係を持つ規範外の欲望は、河口のいう「悪い市

---

[26] 村上春樹 前掲書、p.135
[27] 村上春樹 前掲書、p.135
[28] 村上春樹 前掲書、p.135
[29] 村上春樹 前掲書、p.135
[30] 東京地方裁判所、平成31年（ワ）第3465号国家請求事件判決、p.16～17

民」であり、一人だけと関係を持つ「良い市民」となることに価値を見出している。「僕」はロマンティック・ラブイデオロギーの規範を内面化した人物といえる。

3. ＜ポリアモリー＞的消費者、クィアな渡会

決まった相手を作らずに多くの女性と交際し、同時に多くの女性と渡会は関係を持ち、そして見送ってきた。ここでは渡会を異性愛者という規範的性愛者ではなく、多重恋愛の実践者という規範から外れたクィアな存在としての渡会の移り変わりを分析する。

まず、ポリアモリーとは「複数の愛」という意味を持つ単語であり、アナポール・デボラは「同時に二人以上の性的パートナーを持つ」[31]性愛のスタイルと定義している。アナポールは繰り返しポリアモリーの関係性に誠実さを強調し、「責任ある非一夫一婦制」[32]であり「お遊びで相手かまわずセックスするような乱交ではない」[33]としている。深海菊絵はこのような関係を「ポリアモリー関係」[34]と訳しており、「愛する者同士の二者間と愛する者を介した二者間から成る、三人を最小単位とした関係」[35]として、三人以上の関係を射程に入れて論じている。

渡会の交際は多くの女性と「親密な、知的な触れあい」[36]を求めるものだったため、セックスは「もう一つのお楽しみ」[37]にすぎない。また、女性が結婚したことによって交際が一度終わりを迎えても、数年後に再開させるなどある程度長期的なものといえる。このような側面から渡会はポリアモリーの性質をもつといいたくなる。

しかし、渡会の交際相手は常に渡会以外に本命のいる女性というだけで、渡会と女性、女性とその恋人、あるいは他の女性たちという関係は常に分断され、三人以上になることはないのである。「パートナーとしての責任分担が何らかの形で求められるような男女関係は、常に渡会を落ち着きの悪い気持ちにさせた」[38]という一文からはポリアモリーとしての責任や誠実さからも距離を取り、消費する側でいたいという渡会の性格が表れている。

渡会と女性たち関係はある一面ではポリアモリーともとれるが、また別の側面ではその定義からはみ出している。かといって、恋愛や性を楽しむだけの一時的な関係とまとめることもできない。渡会は一度去った女性から連絡があれば、また交際を再開させるだろう。

ここで、一対一の規範的な性愛と距離を取りつつも、多数と誠実な関係を構築するポリアモリーでもないあり方として、ポリアモリー＜的＞としてみる。

渡会はこのポリアモリー＜的＞生活を 30 年近く送ってきたが、「彼女」によってすべて崩壊させられ

---

[31] デボラ・アナポール（2022）『ポリアモリー』河出書房新社、p.16

[32] デボラ・アナポール 前掲書、p.16

[33] デボラ・アナポール 前掲書、p.17

[34] 深海菊絵「意志による「愛」と意志の限界にある「愛」――米国におけるポリアモリー実践の事例から――」『くにたち人類学研究 Vol.5』（2010 1 .5,5、くにたち人類学会、p.8）

[35] 深海菊絵 前掲論文、p.8

[36] 村上春樹 前掲書、p.132

[37] 村上春樹 前掲書、p.131

[38] 村上春樹 前掲書、p.131

る。渡会は女性たちについて「肉体なんて結局のところ、ただの肉体に過ぎない」[39]と豪語しており、この認識が彼の「華麗な私生活」を支える根幹だったのだが、「彼女」を「ただの肉体」以上の「総合的なもの」[40]として認識することで「華麗な私生活」を瓦解させられていく。

「僕」はこの崩壊の過程に、「たとえいくらか遅かったとしても、最後まで気づかないでいるよりはずっといいのではないか」[41]と、渡会が命と引き換えにして得たであろう成長を書き込もうとしている。一夫一妻制への回収を、「僕」は成長として推進しているのである。

だが、渡会は「彼女」が「第三の男」へ向かっていくという脈絡のない喪失のショックを受け、拒食症のような症状によって自死してしまう。ダルミはこの死に、渡会がこれまでしてきたこと、つまり女性を肉として扱ってきたことの罪悪感と向き合っているという無意識の働きを指摘している。だが、ポリアモリー＜的＞生活との関わりから渡会の死を読んだとき、そこにはまた別の意味合いが付加される。それは渡会のいわば＜産まれ直し＞である。

4. 規範への回収

渡会は「彼女」が他の女性との比較が意味をなさないと思うほど深く恋をし、これまでのポリアモリー＜的＞生活から一転して、一対一の関係を運営するモノガミーへ転身する。この試みは渡会が生きてきた中で築き上げてきた価値観を破壊し、改めて作り直すものであり、そのために「私とはいったいなにものなのだろう」[42]という実存的な悩みにつながっている。人間は産まれてから思春期を迎え、自身のセクシュアリティと向き合い、その関わり方のメソッドを自分なりに構築し、自分の人生を運営していくことになる。そして渡会にとっては、そのメソッドがポリアモリー＜的＞生活であった。

しかし、「彼女」に恋をし、彼女とだけの関係を求めるとなると、これまでのメソッドは意味をなさなくなる。これまでのメソッドを捨て、新しくモノガミーとしてのメソッドを構築することは、もう一度人生をやり直すことにほぼ等しく、だからこそ「人間が丸裸で人生をスタートする」[43]仮定を通して、自分がこれまでに送ってきた人生が、まったく意味を持たない、無駄なものであったように思え」[44]る苦痛を抱えながら＜産まれ直し＞を遂行する。

この＜産まれ直し＞は渡会の自死という終わりを迎えるが、その結果はどうだったのか。死に際に後藤を介して渡されたラケットに、「僕」は渡会が死の間際に見出したメッセージを読み込もうとしている。そしてそれは、ポリアモリー＜的＞生活と、「彼女」をめぐるモノガミー生活のせめぎあいの中で見出された、どちらを選び取るのかという結論であるはずだ。

晩年の渡会がどちらに属することになったのか本文では明言されない。しかしながら、ポリアモリー

---

[39] 村上春樹 前掲書、p.131
[40] 村上春樹 前掲書、p.146
[41] 村上春樹 前掲書、p.147
[42] 村上春樹 前掲書、p.149
[43] 村上春樹 前掲書、p.152
[44] 村上春樹 前掲書、p.152

＜的＞生活の過去を抱え、「彼女」との関係が終わり拒食によって「ゼロに近づいていく」 状況にあった渡会から渡されたラケットは「僕」にとっては軽いものであることや、嘘と恋を司る＜独立器官＞をめぐる独白で渡会と「僕」は「同じ山頂にたどり着いた」 とも書かれていることから、渡会の「やり直し」は遂行されたと「僕」は判断しているようである。渡会の重みがまっさらなゼロになることは、渡会はポリアモリー＜的＞生活やその罪悪感から解き放たれて、新しいメソッドであるモノガミー、「僕」と「同じ山頂にたどりついた」ことになる。

この重さと軽さの転覆は、次の章で定めていきたい。「独立器官」という文章を書いている「僕」は価値判断を行う人間であり、渡会を称揚しつつもそのメッセージが込められているラケットは「軽い」という矛盾が、この作品の鍵になるためである。

5．重さと軽さの転覆

重さ、軽さには多くの意味が伴う。そして「重々しい」とか「軽々しい」というように、価値を判断するときは「重い」ことが優れているという印象を与える。そうみると、渡会からもらったラケットを軽さのために使わない「僕」は、「独立器官」の文章上では渡会を祭り上げながら、彼が死に向かっていく中で見出した答えを貶しているのだろうか。メッセージは軽く、そして「僕」はそのメッセージを受け取らないという構図なのだろうか。

これまでに築き上げたものを捨ててゼロへ指向する欲望について、村上の発言を援用しよう。2015 年 1 月 15 日から 5 月 13 日まで運営された村上と読者との交流ウェブサイト「村上さんのところ」（後日、同名の書籍として発刊されている）で、村上は愛とは何かについて尋ねられた際に「誰かを好きになって、この人のためなら何を捨ててもいいと思ったことはありますか？　それが愛です。簡単です」[45]と答えている。

整形外科医という社会的地位に加え、高級住宅地で洗練された生活を送る渡会が、その地位や財産を失う過程は、すなわちゼロに向かっていく道のりである。生き方も財産も社会的地位も、全てを渡会は捨てていく。その果てに見えたものは先述した村上の発言と重ねることで、たとえ無意味だったとしても誰か一人を愛していたという達成に他ならない。

村上の発言と合わせて渡会の愛のありようを考えるならば、渡会の愛は＜捨てる＞ことによって実現する。資産を渡し、身体をゼロに近づけ、過去を捨てる。そして「彼女」は奪うことで自身の欲望を実現する。

渡会はポリアモリー＜的＞生活を捨て、モノガミーとしての人生を再構築する＜産まれ直し＞を試みており、ここで「僕」はその達成を読み込んでいる。過去の重みを取り去り、自分の命を投げ出してもいいほど深く「彼女」を愛したことで、ポリアモリー＜的＞生活からモノガミーへの移行がなされている。

愛ゆえに命を投げ出した渡会の「痩せ衰えた」[46]身体とラケットがアナロジーで結ばれ、それは「僕」

---

[45] 村上春樹（2018）『村上さんのところ』新潮文庫、p.556

[46] 村上春樹 前掲書、p.177

にとって痛ましいものとして思い起こされるが、同時に異性愛規範に渡会が回収されたという達成の証でもある。重さと軽さの価値を、「独立器官」では転覆させられている。

渡会は「彼女」を愛するなかで自身が築いてきた過去の重さを疎ましく思い、「僕」はその過程に価値を見出し、しかしゼロへ向かっていくという結末によって「僕」は価値判断の基準が揺るがされている。そのような中で、重さと軽さはある時には撹乱されるという補助線は有効であるように思う。

6．奉仕者としての「ゲイ」、後藤

ポリアモリー<的>生活と重さの軽さの転覆から、渡会は<産まれ直し>を完遂させて、モノガミーへ回収された。では渡会の補佐をし続けていた後藤についてはどうだろうか。

彼のやってきたことは公私にわたる渡会の補佐であった。動機としては「裏方として、できる限り渡会先生の役に立ちたい」[47]というものだという。また、渡会と親しく交際している女性を想起した際の「諦めの気持ちを表明するみたい」[48]なため息から渡会への愛情を読むことができる。

渡会はヘテロであるために現状以上に親しくなることは難しく、また、そう読むと渡会の交際の管理も本人の心情としてはつらいものだったかもしれないという推測ができる。しかし、秘書でしかない後藤は渡会に関わるには業務を介してしかなく、「それが喜び」[49]ということもあって、後藤は気持ちを押し隠し「良い市民」として渡会のサポートを行うしかなかったのかもしれない。もしくは、いろいろな女性と遊んでいれば誰も本命ではないと考えることができるため、管理の苦痛よりも、「彼女」に入れ込み始めたことの方が後藤にとっては苦痛だったかもしれない。これらは想像の域を出ないものの、後藤は秘書として渡会の中での地位を確立していることは間違いなく、それは後藤にとってはある種の慰めになっていたとも思われる。

しかし、ゼロに向かっていく渡会から後藤は失われてしまう。後藤はこれまでの生活で多くのものを渡会から学んだはずで、それは間違いなく後藤にとって大切な記憶となるだろうが、「その目は僕を見ていながら実は何も見ていないんです。（略）それはとても哀しい目でした」[50]というように晩年の渡会からはもう後藤は失われることとなる。

後藤の注力があって「華麗な私生活」を送る渡会と、その生活を支えることが幸せだったという後藤は、ほとんど表裏のように結びついている。後藤がいなければ渡会の「華麗な私生活」はうまく運営されなかったし、うまく運営することそのものが渡会との関係を強化しているからだ。

後藤から渡会への絆はクィアな欲望とも尊敬とも読めてしまい、欲望と呼べるような表現は作中には見当たらなく、渡会を自分のものにしたい、渡会とセックスをしたい、女を抱くのをやめて振り向いてほしい、渡会の記憶を自分だけで持っていたい、こういった意識は作中からは抜き取られている。河口のいう「脱性化」（渡会と親交のある女性を口説くようなことはせず、渡会に対しても性的なアプローチをか

---

[47] 村上春樹 前掲書、p.161
[48] 村上春樹 前掲書、p.163
[49] 村上春樹 前掲書、p.161
[50] 村上春樹 前掲書、p.166

けない）のメカニズムによって、「裏方」を徹底して渡会の性行動を補佐する後藤は紛れもなく「良い市民」として振舞っているのである。それゆえに、後藤は「僕」の価値観、ひいては「独立器官」に蔓延する異性愛規範に対し何か異議を上げることはなく、異性愛規範を覆い隠し、ロマンティック・ラブイデオロギーを強化している。

「もちろんゲイ」という行動と恋愛を連結させる「僕」の思考や、「ゲイだと聞いていなければ、ごく普通の身だしなみの良い青年」[51]というような「僕」の認識も問い返されることなく、「僕」は後藤が「これからの人生をうまく生きていくことを願」[52]い、宙づりとなったまま「独立器官」の物語は終わる。

7．おわりに

本稿の目的の一つは、渡会と「彼女」をめぐる異性愛の物語として中心化されてきた「独立器官」を、異性愛だけでなく一対一の関係であるロマンティック・ラブイデオロギーも取り外したクィアな物語としてとらえなおすことであった。

ここまで、渡会の送るポリアモリー<的>生活はモノガミーに回収され、後藤は「良い市民」であろうとするために異性愛規範を強化し、「僕」は常にその規範を推進しホモフォビアも問い直されることはない、ということを論じてきた。では、この物語は既存の規範を強化するばかりでどこにもたどり着かないのだろうか。いや、そうではないのだ、ということを書いて本稿を終えたい。

物語の終盤、「僕」はこれまでの語りの権力を振りかざすことをやめ、渡会の運命は「分からないことだらけ」[53]で、死の間際の渡会の思いも「知るすべはない」[54]と意図的にテクストの空白を示すような表現が多くなる。これまでとは違って断定することを避けて多くの保留を重ねており、「僕」のジャッジが揺らいでいることが分かる。

「僕」のジャッジの基準は内面化された異性愛規範であり、情報を加工して読者の読みを誘導する語りの裏には、異性愛規範から外れた性愛を周縁化し、ステレオタイプとしてまとめてしまう偏見が潜んでいる。渡会の「華麗な私生活」を支える後藤のセクシュアリティを「もちろんゲイだった」と明かす叙述や、容姿の描写を「ゲイだと聞いていなければ、ごく普通の身だしなみの良い青年に見えた」とまとめる叙述はそのような無意識の表れだろう。雇い主が交際する女性との旅行の手配や、彼女らの生理周期を把握までする献身に、「僕」は性愛の気配を読み取り、それを「もちろん」として読者にも共通認識を求めていることは明らかであろう。そして物語の終わり「僕」は一定の規範の境界を引いたまま、その態度を顧みることはない。

渡会からもらったラケットは何度も繰り返すようだが「軽い」ために「僕」には合わず、死に向かっていく渡会を思い起こさせるために使われない。異性愛規範に向かっていく渡会は、自身の過去を捨てていく。そのためにラケットは「軽い」。しかし、「僕」は本文末尾の様子からは誰かを命を捨てるほど愛す

---

[51] 村上春樹 前掲書、p.159
[52] 村上春樹 前掲書、p.174
[53] 村上春樹 前掲書、p.177
[54] 村上春樹 前掲書、p.178

ような予感はなく、異性愛規範でくくってみても渡会と「僕」は決定的に立場を異なものとしている。過去を捨てることのできた渡会の「軽さ」は、「僕」にとっては手に馴染まない。

そのような異性愛規範にとらわれた「僕」の語る物語として解釈をここまで推し進めてきた。しかし、「僕」の語りは渡会を称揚するものであり、「後藤青年がどこかでこの文章を読んでくれればと思う」というように、「独立器官」の読者として後藤が想定されているという二点を忘れてはならない。

渡会の愛が肯定されることで、後藤の愛もまた肯定されていく。「僕」は偏見の潜む語りながらも、彼ら二人の愛を書き記している。たとえそれが幻に過ぎなくても「ポートレイト」として保存することで、残された者は対象の美しい瞬間を読み直すことができる。そして「僕」によって想定された読者の後藤がこの「独立器官」を読んだときに、テクストを通して渡会を思い出す道筋になるかもしれない。

クィアな物語として「独立器官」をとらえるとき、異性愛規範やロマンティック・ラブイデオロギーの強力な磁場が見えてくる。しかし、その反論もまた語りの中に内包されていることに気付くと、「独立器官」は後藤が「これからの人生をうまく生きていくことを願」うテクストとして立ち上がる。

〈謝辞〉

この論文は第三回村上春樹研究フォーラムでの発表「村上春樹「独立器官」論――「僕」の語りの不完全さ」を大幅に改稿した。発表の機会を与えて下さったこと、また会場での貴重なご意見を頂いたこと、深く感謝申し上げる。

【榊　裕希（日本近現代文学）】